

# 日本仏教の再「大乘」化 のための処方箋

日本の仏教は大乘で東南アジアの仏教は小乗と一般には考えられているが、実際には日本仏教は小乗化してしまっている。「小乗」性を乗り越えようとしているタイ仏教の改革運動から日本仏教と日本社会の再大乘化のための手がかりを探る



浅見靖仁

【あさみ・やすひと】

一九六〇年愛知県生まれ。一橋大学大学院社会学研究科助教授。東京大学教養学部を卒業後、タイに四年間滞在。タマサート大学大学院経済学研究科修士課程修了。一九九〇～九三年にはハーバード大学大学院政治学研究科博士課程に留学。

## はじめに

「日本仏教を叱る」ようにという依頼をGYROSの編集部から受けた。人間誰でも叱られるのはあまり好きではないが、叱るのはそれほどイヤなことではない。特に相手があまり強くないときではない。特におおさらである。昨今のご時世では、政府を叱ったりしようものなら、反日分子のレッテルを貼られて、あげくのはてには、「自己責任」と称して金まで請求されかねないが、最近めっきり元気がない日本仏教なら思う存分叱つても大した仕返しはないだろうと思ひ、気軽に依頼を引き受けることにしたしだいである。

ところがいざ叱つてやろうと思つて少し考え始めたら、この依頼、結構難しい依頼だということに気がついた。まず叱る対象である「日本仏教」とは何かということが問題となる。ここでいきなり「日本仏教とは何か」という

哲学的な問いに取り組もうというのではない。日本仏教を叱るといっても、具体的には日本仏教を担っている人たちを叱るということになる。では日本仏教を担っているのは誰かということになる。この依頼を引き受けた時には、それはもちろん僧侶であり、教団であると考え、だから日本の僧侶や教団を叱ればいいのかと考えていた

のであるが、よく考えたら、日本仏教というのは何も僧侶や教団の専有物で決していないはずである。もし日本仏教が僧侶や教団の専有物に過ぎないとしたら、それはもう「叱る」にも値しないであろう。

でももし日本仏教を僧侶や教団の専有物ではなく、一般信者、さらには信者なのかどうかさえはつきりしない

## 「特集のねらい」

江戸時代の日本仏教は葬式仏教と批判されました。宗教本来の使命である人の魂の救済をわすれ、幕府権力にとり込まれた檀家、本寺末寺の制度に安住して、葬式・仏事に明け暮れたというきびしい見方です。そうした批判を現代の日本仏教は払拭しきったのでしょうか。一般寺院は寺の土地を切り売りして営利事業に明け暮れ、有名大寺院は観光に精出すなど、世俗化は一段と進んできているようにみえます。強大宗派が政治に大きな発言権を行使している事例も見慣れた日常です。

多くの日本人にとって、仏教は先祖伝来のほとんど唯一の「宗教」です。普段は忘却していても、生老病死の節目に思い起こすのは仏教です。そうした日本人の伝統的な心情を利用して、仏教各派は営利団体、政治団体となってしまったかの感さえうけます。寺と金と票をめぐる紛争のニュースは跡を絶つことがありません。

各宗祖が新しい仏教教義の探求に生命を賭した鎌倉仏教を例にもちだすまでもなく、仏教は日本人の過去の精神史に大きな刻印をのこしてきました。そして現在も未来も可能性に満ちた宗教です。その可能性をあきらかにするために、一部の日本仏教の現状はきびしく批判されなければなりません。批判の意識をもちながらそれぞれのテーマについてお述べください。

※執筆依頼時に添付された「特集のねらい」。依頼時の特集タイトルは「日本仏教を叱る」だった。

小乗仏教は保守化形骸化してしまっていて一般の在家信者のことなど顧みない。「劣った」仏教だと日本では一般に考えられてきた

が、それでも自らの思考や嗜好を形成する上で日本仏教からなにかの影響を受けている日本人の多くにも共有されているものと考え、また日本仏教は僧侶たちだけに担われているのではなく、そうした一般の日本人の多くによっても担われていると考え、当然私自身もその中に含まれることになり、「日本仏教を叱る」ことは僧侶やら教団だけを叱るのではなく、私自身をも叱ることになりかねないということに今さらながら気がついたのである。

日本仏教を叱ることがどのように自分自身をも叱ることにつながってしまうのかというややこしい問題はひとまず横においておくことにして、まずは

簡単なこと、つまり日本の僧侶たちを叱ることから片づけておくことにしよう。

### タイ仏教との出会い

そもそも仏教僧でも仏教学者でもない私が仏教に関心を持つ大きなきっかけとなったのは、今から二〇年ほど前にタイに留学していた頃のことである。農村開発に関心があった私は、タイのあちこちの農村を訪ね歩いてきた。そうするうちにタイの仏教僧たちの中に農村開発に積極的に取り組み、しかも政府による公共事業中心のいわゆる「上からの開発」的なアプローチではなく、それぞれの地域の特性をいかけた民衆参加型の開発をめざしている

グループがあることを知り、実際そうした僧侶が活動をしている農村をいくつか訪ねたりもした。このような活動をする僧侶はタイでは「開発僧」(プラン・ナック・パター)と呼ばれる。私は何人かの「開発僧」と知り合いになり、彼らを通じてさらに別の開発僧やまた開発僧ではない、さまざまなタイプのタイの僧侶たちと知り合うことになった。

私がタイに留学していた一九八〇年代にはタイ語を話すことができる日本人がまだ少なかったため、いろいろな人から通訳を頼まれた。タイの僧侶に知り合いが多く、また一般の人があまり知らないような仏教用語も多少は知っているということで、タイの僧侶が日本人と会う際の通訳を依頼されることもよくあった。

ある時、タイの開発僧の活動を見学に来た日本の年配の僧侶が、「小乗仏教の僧侶でもこういう活動をするの

ですか？」と質問した。その前後のその人の言動から考えて、特に深い考えがあつて発せられた質問というわけではなく、ただ単に素朴な疑問として彼の心にわき上がった問いをそのまま口に出しただけのように思われた。通訳としてその場に居合わせた私は一瞬途方にくれた。目の前にいるこのタイの僧侶は、そもそも彼が信仰し、実践している仏教が「小乗」仏教であると認識しているのかどうかさえ疑問に思われた。「大乘」はタイ語ではパーリ語をそのまま使つてマハヤーン、「小乗」はヒナヤーンと呼ばれる。しかしタイ人自身は普段は自分たちの仏教のことは「小乗」(ヒナヤーン)とは呼ばずに「上座部」(テラワート)と呼んでいる。

### 日本人の小乗仏教観

その時そのタイの僧侶が何と答えたかについて書く前に、日本人の「大乘」

仏教観と「小乗」仏教観について少し確認しておきたい。日本では学校教育の場においても、仏教には「大乘」と「小乗」の二種類があると教えてきている。少し前から「小乗」というのは蔑称なので使うべきではなく、「上座部」と呼ぶべきであると教えるようにはなっているが、ほとんどの場合それは言葉の置き換えに過ぎず、その内実においては東南アジアの仏教は、日本の仏教と比べると論理的にも哲学的にも数段劣った「小乗」仏教なのだという見方が一般的であったといつても過言ではなからう。

岩波書店から出版されている『仏教辞典』の「大乘仏教」の項目には、「……小乗教徒が自利のみに走り、一般の在家信者を顧みない傾向が強かったのに対し、菩薩たち(大乘仏教の僧侶のこと)はみずからが仏陀となることとともにも、あるいはそれ以上に、あらゆる人々をさとらせ、救済しようとする慈

悲を強調したから大乘という」と書かれている。また、山川出版社の『世界史用語集』は「大乘仏教」について、「紀元前後から、保守化形式化した小乗仏教に対して興つた新仏教。【大きな乗り物】の意で、菩薩信仰をもとに、すべての人間の救済をめざす。実践的になるとともに、深遠な教理が形成されていった」と説明している。つまり小乗仏教は保守化形骸化してしまつていて、深遠な教理ももたず、実践的でもなく、自利のみに走つて、一般の在家信者のことなど顧みない「劣った」仏教だと日本では一般に考えられてきたのである。

そうした「常識」を身につけた日本人が、あばら屋のような粗末な寺に家族も持たずに暮らしながら、村人の暮らしぶりをよくするための活動を熱心に行っている開発僧を見ると、「小乗仏教なのにどうして……」とつい思ってしまうのであろう。しかしその逆

に、タイで開発僧たちの活動を見た私には、日本の僧侶や教団、さらには仏教学者の有り様をみると、思わず「自ら大乘仏教だと名乗っているのにどうして……」と尋ねたくなってしまうのである。

静谷正雄は、大乘仏教が起こった背景を次のように説明している。

まず第一に、部派仏教のあり方に対する強い不満があげられる。紀元後一世紀になると、部派教団の比丘たちは、その所属する部派の僧院内に定住し、豊かな寄付財産に支えられて、仏典の注釈的研究に専念するようになった。彼らは世俗社会から分離した僧院内で、その生活環境にふさわしい遁世的な声聞道の体系樹立に没頭した。もちろん、部派教団といえども世俗信者への教化を軽視したわけではなかったし、在家信者に大きな影響力をもつ部派の高僧もい

## 仏教の「小乗化」現象を自分自身も含めて

### 日本社会全体にかかわる問題としてとらえる必要がある

た。そうでなくては僧院の建立も、僧院への豊かな寄進も、生まれてこなかったはずである。しかし、全般的にいえば、彼らは世俗社会の利福に対する積極的な関心と行動を欠いていた。彼らはますます精密となった教義の研究と声聞道の修習に追われ、自己自身の解脱だけを第一にして、他の人々を利益する態度を忘却したのである。

(静谷正雄『初期大乘仏教の成立過程』百華社、一九七四年、二九一頁)

しかしここに描かれている部派教団、つまり小乗仏教の姿は、まさしく現在の日本仏教のあり方そのものではないだろうか。僧侶は僧院内に定住し

ているだけでなく、それを自分の私有財産だと見なしている。僧侶の多くは、仏典研究になどあまり興味を示していないが、かといって世俗社会の利福のために積極的に行動をしているわけでもない。もちろん仏典研究にいそんでいる僧侶や仏教学者もいるが、その多くは、世俗社会から隔離された僧院やら大学の研究室の中で仏典の遁世的、注釈的研究に専念しているだけで、世俗社会が抱えるさまざまな問題に対しては黙して何も語らない。

### 日本仏教と日本社会の「小乗化」

現在の日本仏教を「大乘」と呼ぶのはまさに詐称であり、学校教育でも、

「もともとは大乘を目指した日本仏教であったが、現在ではタイ仏教よりもずっと小乗的になっている」と教えた方が、東南アジアの仏教に対して根拠の全くない優越感を日本人が抱いてしまうことを防ぐことができるであろうし、また東南アジアの仏教から学ぶ貴重な機会をみすみす逃してしまうという大きな損失を防ぐ上でも望ましいようにさえ思われる。

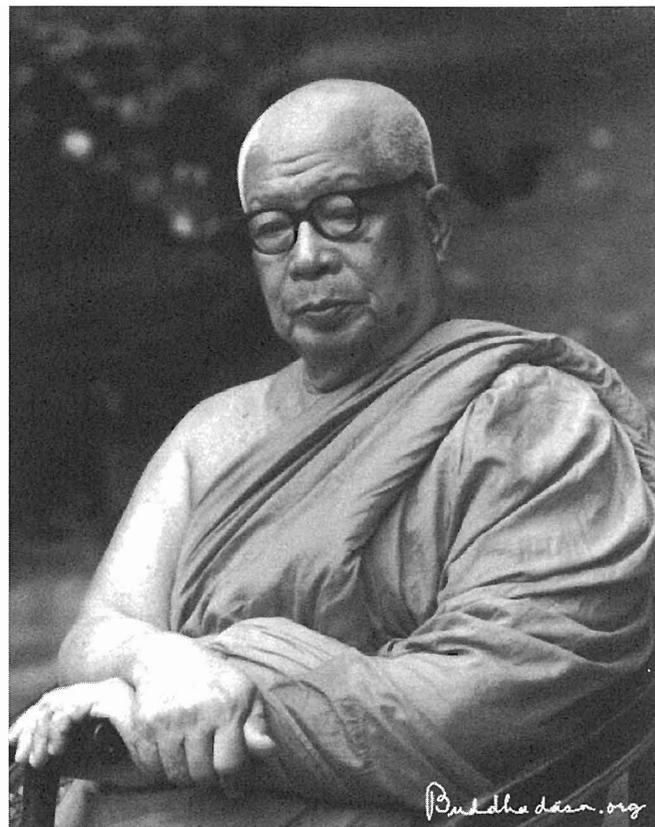
さてこうした問題が、ただ単に仏教僧や仏教教団だけに関係することであれば、ただ彼らの体たらくを「叱る」だけでいいであろうが、「小乗化」、つまり保守化して現状追認に終始し、自利にのみ走って、他人のことなど顧みなくなるということは、仏教界にだけ見られる現象ではなく、日本社会全体に広範に見られる現象であることを考えると、ただ単に仏教僧や仏教教団だけを「叱る」だけでなく、「小乗化」現象を自分自身も含めて日本社会全体

にかかわる問題としてとらえる必要がある。

しかしただ現状を嘆いているだけでは、事態は好転しない。また日本社会の「小乗化」の原因は日本国憲法と教育基本法にあるとして、それを大日本帝国憲法と教育勅語に置き換えることを主張する者もいるが、日本仏教と日本社会の「小乗化」は何も戦後に始まったことではないことを考えれば、そんなことによつて「小乗化」問題が解決するとはとても思えない。この問題はどこかに簡単な答えがころがっているようななまやさしい問題ではないが、この問題に取り組むためのいくつもの重要なヒントを、タイをはじめとする東南アジアの仏教の新しい動きの中から見いだすことができるのではないかと私は考えている。「小乗化」した日本仏教を「再大乘化」するためのヒントを得るために、再び話をタイに戻すことにしたい。

### タイの開発僧の反応

話を先ほどの場面に戻そう。「小乗仏教なのはどうして……」と尋ねられたタイ人の開発僧は、私の予想に反して「大乘」仏教が「小乗」仏教をどのようなものとして見ているかをよく知っていた。そして静かにこう答えた。「確かにこれまでタイの仏教は自利ばかりに目を向けすぎていたと思う。でも上座部仏教でもその本来の教えを實踐すれば在家信者や自然環境を顧みないで自らの解脱だけについて考えるということはできないはずだ。私はこの上座部仏教のやり方に慣れ親しんでいた。上座部仏教の方法で、社会活動も続け、また仏教僧としての活動も続けていくつもりだが、これが唯一絶対の方法だとは思わない。大乘には大乘のやり方があるだろうし、きっとそれによつても仏教僧としての修行と社会のための活動とを互いに関係させ合



プッタタート

いながらその両方を行っていくこともできるだろう。大乘にはそうした長い経験があるのだから、私も機会があればそうした大乘の経験からも学びたいと思っている。日本の僧侶が今いろいろ

ろな社会問題にどのように取り組んでいるのか教えていただけたらと思う」このタイ人の僧侶は、日本の僧侶は酒も飲むし、結婚をして、家族も持っていると聞いて目を丸くしていたくらいだ

から、日本仏教の実態についてほとんど知識が無かったと思われる。だから、日本の僧侶の社会問題への取り組みについて逆に質問したのも、「偉そうに大乘と名乗っているあなたたちだつて、大したことは何もしていないではないか」という反論を試みようとしたからではなく、これまた極めて純粹で素朴な興味から出た質問のように思われた。その時日本側の僧侶が何と答えたのかは私はよく覚えていない。彼が何かもそもそと少し決まり悪そうに言い、私はその答えをあまり感心せずにとりあえずタイ語に訳したということだけが記憶に残っている。

その時タイ人の僧侶もこの問題についてはそれ以上語ろうとはしなかったが、私は少し気になったので、別れ際に上座部仏教の立場から社会活動に僧侶がかかわることについて何か書かれたものがあれば教えてほしいと言ってみたところ、そういうことに関心があ

るなら、プッタタートの著作を読むといいと言われた。

私はプッタタートの名前はそれまでも何度も耳にしていたし、実はその写真も何度も見たことがあった。当時私はタイのいろいろなNGOの事務所などに出入りする機会が多かったが、そこにはよくプッタタートのポスターが張ってあった。また社会問題を扱う本などをたくさんそろえているバンコクの本屋で本を買った時に、粗品としてプッタタートのカラー写真のついたきれいなしおりをもらったこともあった。

プッタタートは、一九九三年に八七歳で亡くなったタイの高僧である。私

プッタタートは

バンコクの仏教の「小乗性」と「欺瞞性」に対して深い失望と強い憤りを感じた

しており、ちょっと大きな書店にいれば彼の著作がずらつとならんでいるという状況だった。前から気になっていたので、開発僧の言葉に従ってプッタタートの著作を何冊か買ってみた。しかし買ってはみたものの、すぐには読まずにしばらくそのままにしておいたのであるが、そのうち今度はプッタタートがいるスワンモーク寺で開かれる仏教と社会活動についての国際会議に日本からも参加者が来るので、その通訳をしないかという話があり、慌てて彼の本を読むことにしたのである。

### プッタタートの経歴

プッタタートは一九〇六年にタイの南部スラータニ県で生まれ、二〇歳の時に地元の寺で出家した。法話が

うまく、パーリ語の習得にも秀でていたプッタタートは、周囲の勧めにしたがつて仏教についての勉強を深めるために、二四歳の時にバンコクに赴き、バンコクの寺院に二年間滞在してパーリ語教典の研究などをした。プッタタートの才能はバンコクの僧侶たちの間でも注目されたが、プッタタート自身はこの二年間のバンコク滞在の間に当時のタイ仏教に強い失望を感じ、バンコクには二年間滞在しただけで、再び生まれ故郷のスラータニ県チャイヤ郡に戻り、そこにスワンモーク寺を開き、以後一九九三年に八七歳でこの世を去るまで、このスワンモーク寺を拠点にし続けた。

プッタタートは、バンコクの仏教の「小乗性」と「欺瞞性」に対して深い失望と強い憤りを感じたのである。プッタタートがバンコクのきらびやかな寺院の中で見たのは、まさに先引用した静谷正雄の著作に描かれていた

プッタタートは  
さまざまな問題や苦しみは  
相互関係性の本来あるべき微妙なバランスが  
崩れたときに生じると考ええる

ような小乗仏教の世界、つまり現在の日本仏教と同じように、遁世的教典研究と教団内の立身出世にしか関心のないようなエリート僧と、ともすれば仏教とはあまり関係のない占いや迷信の方に気をとられがちな一般僧からなる世界だった。プッタタートはそのような当時のタイ仏教に失望し、それにかわる仏教のあり方を模索し、実践しようとして、生まれ故郷のスラータニ県に戻って山寺を開いたのである。彼

は多くの人々の尊敬を集め、社会活動家だけでなく、政府高官の中にもその信奉者が多く、またタイの仏教界の中枢からもその高い学識に対して一目を置かれていたが、タイの仏教教団組織

内の位階には関心を示さず、教団内の重要な役職には就こうとしなかった。当時のタイ仏教の「小乗性」を乗り越えることを目指したプッタタートの思想と行動は、タイ仏教以上に「小乗化」してしまっている日本仏教を再生させたいと思う者にとって参考になると思われるので、彼の思想と行動について少し紹介しておくことにしたい。

### プッタタートの仏教思想と タイ仏教の「大乘」化

彼の思想の根幹をなすものは、「相互関係性に対する気づき」とでもいう

功德を少しでも積んで来世に期待するといったことが考えられるだけだったが、縁起が今世で完結するものということになると、ある人が貧しいのはこの現世のどこかにその原因があることになるのである。

プッタタートは、さまざまな問題や苦しみは相互関係性の本来あるべき微妙なバランスが崩れたときに生じると考える。ある木が枯れる時、その直接的な原因はその木の内部の生物学的バランスが崩れたことにあるかも知れないが、その木の内部の生物学的バランスが崩れた原因はその木の周辺の生態系のバランスが崩れたことにあるかも知れない。またある人が悩み苦しんでいるとき、その直接的な原因はその人の心のバランスが崩れたことにあるであろうが、その人の心のバランスが崩れた原因はその人を取り巻く人間関係や社会の構造に問題があるからかもしれない。

べきものである。「相互関係性」とは仏教用語で言えば「縁起」である。従来のタイ仏教では「縁起」は主に時系列的に縦方向に作用するものだと考えられていた。つまり前世の行いが今世に影響し、今世の行いが来世に影響するという考え方である。ところがプッタタートはこうした縁起観を否定し、水平方向の「縁起」、つまり同時代的な関係性を重視するのが本来の仏教だと説いた。プッタタートはパーリ語で書かれた原始仏教経典に直接あたることによって、ブッダ自身は死後の世界については語っておらず、ブッダの教えは「この世」と「あの世」の一方的な関係性についてではなく、「この世」の森羅万象の間の相互関係性について述べていると主張したのである。

そしてプッタタートは、この世の物事はすべて互いに関係し合っていることを理解することによってこそ涅槃に達することができる」と説く。プッタ

タートは涅槃とは「自我」または「自性」が「空」であることを深く実感できている状態だと定義する。そして「自性」が「空」であることを理解するためには、すべてのものが関係し合っていることを理解する必要があると主張する。そこに全く何もないから「空」なのではなく、そこにあるものが他のものすべてとつながりあい、関係し合っているから、それをそのものとしてだけ認識しようとすればそれは「空」となるというのである。

プッタタートによる「縁起」と「涅槃」のこのような再解釈は、タイの僧侶や一般信徒の行動に大きな変化を迫るものとなった。従来のタイ仏教では、ある人が貧しいのは、前世の行いに原因があるとされ、それへの対処法としては、前世の悪行の悪影響を何らかのまじないで取り除くか、または今世での不遇は運命とあきらめて、とりあえず今世ではせつせと寺に寄進でもして

「弊」に近づいたことが、社会全体、そして人間社会をも含めた生態系全体の本来あるべきバランスを回復、維持することに何らかのかたちで貢献できる場合においてであるとブッタタートは考える。

そしてそのような本當の涅槃の方向に進むためには、他のことに関心をもたずにただひたすら快適な環境の下で三昧(サマーテイ)や止観(ウィパッサナ)をすることよりも、他の人々のために汗を流して働くことの方がずっと意味があることであり、三昧や止観は他の人々のために働きながらでも行うことができるし、またそうすべきであると説いた。またこの世の中のものすべてが互いに関係し合っていることを理解するためには、自然をよく観察して、さまざまな生き物が互いに互いに関係し合っただけでなく、微妙なバランスを保ちながら共存しているかを知ることが非常に重要であるとして、「自

然に学ぶ」ことも推奨した。寺の中だけに籠もって自らの解脱のことだけに執着している僧侶よりも、他の人のために我を忘れて熱心に働いている社会活動家や生態系のバランスを守ることに努めている環境保護活動家の方がブツダの教えに忠実にしたがっているものであり、彼らの方が涅槃の境地にもより近いところまで行けるともブッタタートは述べている。

このようにブッタタートの思想は、仏教が僧侶以外の一般信徒に対してどのような意味を持つことができるかを強く意識したものとなっている。こうした傾向は彼と彼の家族及びその地域の人々との関係に由来しているところが少なくないと思われる。

バンコクの仏教に幻滅した時、ブッタタートは誰も知らない土地の人里離れた山奥に籠もったのではなく、家族のいるスラータ二県のチャイヤーに戻ってきたのである。仏教教団内の立

身出世の道を捨て、自分が正しいと思うような修行を続けながら、パーリ語の仏教経典を読み進めたいという彼を経済的に支えたのは彼が生まれ育ったチャイヤーの町の人たちであり、また年老いてきた両親の面倒を彼にかわつてみたのは、彼の弟であった。彼の弟も仏教には強い関心があったが、兄弟が二人とも僧侶になってしまったのは、両親の面倒を見る者もいなくなつてしまったため弟は出家を断念し、両親が経営していた小さな店を継いだ。弟は僧侶とはなれなかつたものの、家業のあいまには熱心に仏教書を読み、友人たちと仏教研究会を作つたりもしていた。

ブッタタートには自分が僧侶として成し遂げたことは、弟の犠牲の上になりたつていてという意識が強くあつた。彼の弟やそのまわりに集まつてくる一般信徒たちにとって、彼が学んだ仏教は一体どういう意味を持ちうる

のかということ、彼にとつて切実な問題であつたと思われる。僧侶にならなくても涅槃に達することができるとか、静かな僧院の中で自分のことだけを考へて瞑想にふけるよりも、自分以外の人のために汗を流して働きながら三昧や止観を行う方が涅槃に向かう正しい道だという彼の説法は、彼のそうした切実な問題意識の中から生まれたのだと思われる。

## ブッタタートとサルトルの アンガー・ジュマン

ブッタタートの著作のいくつかは英語に訳され、欧米の仏教徒たちにも

大きな影響を与え、ベトナム人僧侶のティク・ナット・ハンとともに、英語でエンゲイジド・ブレイズムと総称される新しい仏教運動の思想的源流の一つにもなっている。エンゲイジドという語がつけられたのは、サルトルが用いたアンガー・ジュマンというフランス語に影響されたことである。ブッタタートの思想とサルトルの思想との間にはいくつか共通点もあるが、重要な相違点もある。社会とのかかわり(アンガー・ジュマン)を重視している点は両者に共通している。違いとしてはそもそもサルトルの方は西洋思想の伝統に基づいて自我の確立めざして、

サルトルは西洋思想の伝統に基づいて

自我の確立めざし

手段としてアンガー・ジュマンを重視した

ブッタタートは仏教思想の伝統に基づいて

自我の確立ではなく、自我の解消を目指した

そのための手段としてアンガー・ジュマンを重視しているのに対し、ブッタタートは仏教思想の伝統に基づいて、自我の確立ではなく、自我の解消を目指している。先に述べたようにブッタタートによれば自我の解消とは、自我も含めてすべてのものごとは無数の相互関係性の中にあることに気づくことを意味する。ブッタタートにとつてのアンガー・ジュマンは、一つにはそうした相互関係性の存在を意識化するための手段であり、またもう一つには相互関係性のバランスを回復するための手段でもある。幸か不幸か現実の世界はバランスの崩れた相互関係性が随所に見られるので、それに意識的に働きかけることによつて相互関係性への理解を深めれば、相互関係性のバランスの回復と相互関係性への認識を深めることの二つを同時に達成できる。開発僧たちはまさにその二つのことを同時に実践しようとしているのである。

じつと見つめていても  
 なかなかわからないのだったら  
 まずは人のために動いて汗をかいてみなさいと  
 プツタタートは言う

またサルトルが人間は白紙の状態からスタートして、主体的な選択に基づいてアンガジェすることによって白地のキャンパスに自分自身を描いていくというイメージを抱いているのに対し、プツタタートは人間ははじめから相互関係性の中に生まれ落ち、相互関係性の中で育つと考える。プツタタートの思想では、相互関係性を主体的に新たに築くことともに、すでに存在している相互関係性に「気づく」ことが重視される。

### 日本仏教と日本社会の 再大乘化を目指して

話がいきさか抽象的になつてしまつ

けることになるのである。

僧侶もこれからは社会にかかわりましょう、では許されないのである。これまで関わっていなかったわけではなく、これまでも関わっていたのである。何があつてもじつと黙って下か横を向いているという関わり方で。プツタタートによれば、自らと社会、自らと自然環境の相互関係性をしつかりと見つめ直すところから始めなければいけないようである。しかもまだ今見つめ直し中だからという言い訳もあまり通用しない。じつと見つめていてもなかなかわからないのだったら、まずは人のために動いて汗をかいてみなさいとプツタタートは言うのである。

さらにプツタタートは、仏教は僧侶だけにまかせておけばいいのではなく、僧侶以外の人も自分と社会や自然

た。日本社会の問題に話を戻そう。ここで簡単に紹介したプツタタートの思想と行動から、日本仏教の「再大乘化」のためにどんなヒントを得られるであろうか。

まずはアンガージュマン、社会へのかかわりであろう。しかしプツタタートのアンガージュマンは、サルトルのアンガージュマンよりも厳しい。サルトルのアンガージュマンでは主体的な選択にのみ「自己責任」が生じるが、プツタタートのアンガージュマンでは、主体的な選択だろうが無意識の選択だろうが、自己責任どころか全員が全体責任をとらされるのである。

僧侶に誰も何も期待しなくなった現

環境との相互関係性を見つめ直して、何か行動しなさいというのである。どんな山奥に逃げ込んでも、あるいは自分の部屋に引きこもつても、それはそれで一つの社会との関わり方になるのだから、どうせだったら社会と意識的にかかわりなさいというのである。そしてどうせ社会と相互関係性をもたなければならぬのだから、だったらその相互関係性をよく理解しなさいというのである。そしてその相互関係性をよく理解するためには、社会に対して意識的に働きかけてみなさいというのである。

プツタタートがタイ仏教にもたらした変化の一つに、僧侶ではない一般信徒が仏教の教理を自らと社会との関わりの方針の一つとするとともに、仏教のあるべき姿についても積極的に発言

在の日本では、イラクに自衛隊を派遣するのはいいことなのか悪いことなのかなんてことを僧侶に尋ねようとする人などまずいないであろう。尋ねられないから答えないし、答えなくてもいいからそれについて考えない。何も判断していいし選択もしていないのだから、この件については私は責任なんかないという言い訳は、プツタタートには通用しない。すべてのことが相互に関係し合っているからには、何も考えず何も答えなかつたことからといって社会とかかわらなかつたことにはならず、何も考えず何も答えなかつたこと、あるいは少しは考えたけど黙っていたこともそれはそれでそういう関係を社会ともつたことになり、すべてのことは相互に関係しているのです。それはきつとどこかで何かの結果につながってくるのであり、その結果相互関係性のバランスに変化が生じれば、自分だけだけでなく他の人もその変化の影響を受

するようになったということがある。タイ仏教の新しい動きにおいて僧侶ではない一般信徒が重要な役割を果たしたことを考えても、日本仏教の再大乘化も仏教僧だけにまかせておくのではなく、仏教僧と一般信徒の相互協力によつて行っていく必要がある。そしてそれは部屋に閉じこもつてお勉強会ばかりをやることによつてではなく、仏教僧と一般信徒が一緒になつてさまざまな社会問題に対して発言し、行動することによつてこそ実現されるものだと思う。この原稿を書くために久しぶりにプツタタートの本をいくつか読み返したら、少しその気になつてしまった。僧侶を叱っているヒマがあつたら、まずは自分自身が社会に対してちゃんと発言をし、行動しなくては。

